

会 議 錄

会議の名称	令和6年度 第2回茨木市産業振興アクションプラン推進委員会
開催日時	令和 6 年 11月 26日 (火) (午前 <input checked="" type="radio"/> 午後) 3時 00分 開会 (午前 <input checked="" type="radio"/> 午後) 5時 00分 閉会
開催場所	茨木市市民総合センター207号室
議 長	野口 義文 氏 (立命館大学 研究部・产学官連携戦略本部)
出 席 者	赤松 正巳氏 (北おおさか信用金庫) 、大岩 賢悟氏 (市内事業者) 、大坪 さやか氏 (市内事業者) 、五寶 美奈子氏 (市民委員) 、辰巳 雪絵氏 (市内事業者) 、辻田 素子氏 (龍谷大学 経済学部) 、中野 拓二氏 (茨木商工会議所) 、野口 義文氏 (立命館大学 研究部・产学官連携戦略本部) 、藤井 茂男氏 (市内事業者) (9人)
欠 席 者	伊津田 崇氏 (中小企業診断士) 、奥山 結衣氏 (市民委員) (2人)
事務局: 職員	足立副市長、下菌産業環境部長、河原商工労政課長、武部商工労政課長代理、長野商工労政課商工振興係長、生田商工労政課職員 (6人)
議題(案件)	(1) 会議の公開について (2) 提案公募型補助制度の審査結果の報告について (3) 令和6年度の取組について (4) 第3期アクションプランの進捗状況について (5) 第4期アクションプラン (素案) について (6) 今後のスケジュールについて

配付資料	<ul style="list-style-type: none">・議事次第・提案公募型補助制度の審査結果の報告について（資料 1）・令和 6 年度の取組について（資料 2）・第 4 期アクションプラン（素案）（資料 3-1）・第 4 期アクションプラン概要（資料 3-2）・第 4 期プランの基本取組・具体的な事業について（資料 3-3）・今後のスケジュールについて（資料 4）・（参考資料）勝負めしメニュー ブック・（参考資料）オープンカンパニーチラシ・（参考資料）小豆島・茨木 EXPO チラシ
------	--

議事の経過

1 開会

事務局：開会のあいさつ

委員出席状況（11人中9人出席により会議成立）

2 会議の公開について

事務局：市の指針に則り、会議は原則公開とする。

会議録は要約したものを公開する。発言者は個人名を記載する。

なお、今回の傍聴希望者はなし。

3 提案公募型補助制度の審査結果の報告について

事務局：（資料1をもとに説明）

＜質疑・意見等＞

委員長：こちらでスタートアップ産学連携の補助金や委員会が関与するすべての公募事業は終了ですね。

事務局：そうです。今年度につきましては、終了となります。来年度向けては、年度末から新たに募集していく形になります。

4 令和6年度の取組について

事務局：（資料2をもとに説明）

＜質疑・意見等＞

委員長：ダムパークいばきたのつり橋の完成が5か月遅れるとのことですが、どのような理由で遅れるのでしょうか。

副市長：つり橋自体は12月中にほぼ完成するのですが、景観や安全性を含めた周辺整備を練り直すとのことで、つり橋エリアのオープンには、少し時間がかかります。

委員長：オープンカンパニーの参加者は195名とのことですが、申込希望者はどれくらいの数だったのでしょうか。

事務局：申込については、インターネット申込であり、上限に達した時点で申込を終了したため、正確な数字は把握しておりません。

委員長：需要が把握できないのは、少しもったいないですね。早い者勝ちで一杯になったら、そこで受付終了になるという訳ですね。

事務局：参加いただいた7社ごとに枠を設けており、企業によっては1枠のところもありますし、4回実施していただいた企業もあります。その枠ごとで調整させていただき

ました。

委員長：辰巳工業さんは、たくさんの応募があったのではないでしょか。

辰巳委員：弊社は山間部にあるため、最初は応募が5、6名程度で終わるのではないかと不安に思っていたのですが、3日で予約が埋まりました。茨木市の広報誌の反響のすごさに驚きました。

委員長：当日の様子は、YouTubeなどで配信されるのでしょうか。

事務局：市民の方が映っているため、どのような配信形式になるかは検討中ですが、当日の様子については、現在動画編集中です。

辻田委員：オープンカンパニーを主体的にやっている方から話を聞く機会があり、鯖江・燕三条では3、4万人レベルで人が来ると聞きました。鯖江・燕三条でこれだけ参加者がある中、茨木市が195名というのは、かなりもったいないと感じます。このギャップを少し真剣に考える必要があると思います。オープンカンパニーを実施してから、1年経過して、本年度は3社参加企業が増えましたが、令和11年度の最終的な目標値でもわずか15社です。大企業も含めて地域の企業に多く参加いただくことで、オープンカンパニーに予約しなくとも、看板が付いている企業には自由に行けるようにし、ワークショップなどに関しては、希望の人だけ予約するという方式にすると企業も一般の方も参加しやすいのではないかと思いました。現在は、市民対象となっていますが、鯖江・燕三条では県外からもたくさん人を集め、色々な企業を回る中で、興味がある企業が見つかり、企業の人材確保につながるケースや企業同士で新しい研究開発をして商品開発につながることもあります。鯖江・燕三条と比べて関西地区は、それほど盛りあがりを見せておらず、成果があまりあがっていない印象です。このことから、次の計画においては、やり方を変えてオープンカンパニーを本格的に実施する方向で進めるのが良いと思います。聞いた話では、行政主導ではなく企業側が主導で実施した方が一気に広がるようですので、今回参加している企業がグループを組んで民間主導でやり方を色々工夫しながら、実施していくのが良いのではないかと思います。

委員長：確かに行政主導だと制約の中でしか実施できませんが、企業主導だと制約を緩めながら実施することもできますね。福井県の眼鏡のまち鯖江、新潟県の金物が有名な燕三条、こちらは人材確保に繋がっている良い例ですよね。辰巳工業さんはオープンカンパニーに参加されていましたが、何かご意見はありますか。

辰巳委員：オープンカンパニーを始めるきっかけとして、茨木市による行政主導は、非常にありがとうございます。その次のステップとして他社との交流をしながら、茨木市の企業の活性化をしていくのが一番だと思っております。今回のオープンカンパニー

一では、他社との繋がりを作ることができたので、今度、弊社にお招きして意見交換を実施する予定です。

委員長：そのような点が面になっていく拡がりが目的の一つでもありますよね。中野委員は、ご意見ありますか。

中野委員：鯖江や燕三条は古くから地場産業がさかんなため、企業文化が熟成しています。茨木市においては、まずは市民に知っていただき、そこから企業文化を熟成させて市外の人に知ってもらう必要があると思います。私は、過去に泉大津で仕事をしていて、泉大津は繊維のまちなので、横の繋がりも強かったです。泉大津は企業文化が熟成しきっていたため、何もできなくなってしまいました。茨木市にも何かひとつ地場産業のようなコアがあると色々とできるのですが、なかなかコアが見つかりにくいので、手探り状態ですよね。

辻田委員：オープンカンパニーに物流の拠点が入れば一気に外から色んな方が来られるようになるのではないかと思います。

副市長：オープンカンパニーをどういう目的で実施するかということは、非常に大事であると考えています。最初に考えたのは、市民の方に身近にある企業を知ってもらうこと、その先にあるのは、企業同士の横の繋がりができ、何か新しい事が起こるのではないかという期待を持っています。どこの地域も企業主導で実施しているところは、うまくいっているところが多いです。鯖江のように観光という観点を含めた大きなうねりになっているところもありますし、燕三条みたいに過去からモノ作りのまちでやってきたところもあります。茨木市が観光などの観点を打ち出すのは、現時点では、なかなか成立しづらいと考えています。まずは、市民の方に知っていただくということを目的として、スマールスタートをしながら、核となる企業ができてきたり、方向性について議論いただき、じっくりとオープンカンパニーを育てていきたいと思います。積極的に外部に出る企業とうまく連携したり、企業に行くだけではなく、体験できる場を作るなど広く様々な視点から考えていきます。

赤松委員：私は、今年から摂津市で実施されている製造業のオープンカンパニーである「摂津キッズファクトリー」に実行委員として携わりました。このイベントは、昨年茨木市で実施されたオープンファクトリーと同様に工場をバスで周遊する形式になります。このイベントの目的は、参加する子どもに対しては、製造業のことを地域の人たちに対しては、その企業を知ってもらうことです。広報としては、市役所と商工会議所が主体で進めており、学校関係に営業をかけ、親子で参加いただく試みで実施しました。実施した2日とも大雨でしたが、500名程の参加がありました。茨木市においてもオープンカンパニーを実施するうえで、どのような方が対象で、どのような目的であるかを明確にする必要があるかと思います。また、参加企業においては、今回5社の参加だったのですが、工場の前にのぼりを立てて実施していたことで、横

の繋がりで近隣の工場や人々に興味をもっていただくことができたこと、その噂を聞いた企業から「次は参加させてほしい」という反響もあり、相乗効果が生まれたのではないかと思います。

委員長：学校と連動するのはいいですよね。子どもが一人くると、お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃんと一緒に5人になる可能性もありますので、極端な話ですが、100人子どもが来ると500名の来場ということになりますからね。オープンカンパニーの今後に関して、考えていく必要がありますね。

副市長：何を成果とするかは非常に難しく、もちろん大勢の方に足を運んでもらいたいのですが、オープンカンパニーに関わられた社員の皆さん、楽しんいただき、その中で得られるものがあるということが、一番ありがたいと思っております。今回茨木市では、実施前に横の繋がりを作っていましたが非常に良かったと思います。

5 第3期アクションプランの進捗状況について

事務局：（資料3-1、3-2、3-3をもとに説明）

＜質疑・意見等＞

委員長：これから詳細の説明に入っていきます。質疑に関しては全体の説明が終わってからにさせていただきます。

6 第4期アクションプラン（素案）について

事務局：（資料3-1、3-2、3-3をもとに説明）

＜質疑・意見等＞

中野委員：全体的に人口が減っていき、茨木市内の事業者数も減少傾向の中、目標達成ができないかった場合は、ペナルティ等があつたりするのでしょうか。コロナ禍を経て社会情勢も様変わりしましたし、見栄えの良い右肩上がりの目標数値で達成できるのかなという心配があります。

事務局：目標なので、下がる目標は、なかなか設定できないというところがあります。維持という目標設定にすることが無いわけではありませんが、新事業展開や操業継続について、市としては、取り組みを実施して、少しでもそういった事業者を増やしていくという意思を表明することが大事であると考えております。つきまして、目標設定としては、上を目指すという形にしております。

辰巳委員：オープンカンパニーを通してですが、茨木市には、世の中になくてはならない会社がたくさんあるなということを改めて実感しました。弊社も茨木市民だけではなく、色々な方に会社を知っていただくということを目標に今回実施させていただきました。次の目標としては、学生の方々にも来社していただき、弊社を体験してもらいたいと考えています。弊社としては、学生目線の意見などが欲しいので、学生にボランティアで参加してもらうなど、ホームページや予約フォームにしても、学生か

ら見た企業のPRがあれば、嬉しいです。体験に関しても、市外の方や海外の方も参加できるようなものにしていきたいという想いも込めて、オープンカンパニーに参加させていただいております。

中野委員：学生とは、就職する前の大学生ということですか。

辰巳委員：人材確保という観点で知っていただきたいですね。今はSNSで情報発信がされたりしていますが、弊社は検索でなかなか引っかからないので、学生さんまで情報が届かないというのが現状です。

委員長：立命館大学であれば、AIとかICTなどの研究を行っている情報理工学部が、今年の4月に大阪いばらきキャンパスにきたので、そのような連携は、今後進んでいくと思います。令和6年の取り組みで、大学生による市内企業のプロモーションとして、追手門学院さんが実施していますよね。こういう取り組みを1大学だけではなく、広げていくのもよいのではないかと思います。辰巳委員の意見は、大事な視点で、第4期アクションプランに關係する資料の中でも、大学という文字は2回、学生という文字は1回しかでてきません。そういう意味では、文字は体を表すで、大学や学生のまちといいながら、文字=表現が圧倒的に少ないので、ご指摘のとおりだと思います。茨木市は、本拠地以外に拠点を置く大学も入れると全部で8校あると思います。一方で池田市は確かゼロです。北摂7市でも差が結構あり、茨木市は吹田市と並ぶくらい大学が多い特性を持っています。したがって、事業者の創出や成長促進のところに、もう少し大学の活用を書き込んでもいいのかなと思います。

大岩委員：第4期アクションプランについては、観光の振興といいながらも商業・産業振興がメインであると思います。来年関西万博が開催されるので、たくさんの観光客が大阪に来られます。そうなると間違いなく茨木市にも、たくさんの方が来られます。外国人留学生が多いまちでもあるので、お友達と一緒に茨木市を歩き回ったりすることもあると思います。来年にはダムパークいばきたのつり橋ができることもあって、茨木市も次のプランの中に観光が入ってくる中で新しい商品、お土産の開発を進めていかなければいけないと思います。私は2016年から茨木市のふるさと納税の返礼品を提供しており、この返礼品に関しては、茨木市以外の方にPRできるという点が良いと思いました。そういう意味では、観光とふるさと納税はリンクするのでは中だと思います。日本国内の方に限られますが、魅力ある商品と繋がっていくことで関係人口が増えてくると思います。オープンカンパニーに関連すると、体験型の返礼品としてできるとなれば、魅力的なコンテンツになると思います。魅力的な商品の開発に施策として取り組み、ふるさと納税もたくさんしていただければ、茨木市も潤うと思います。中心市街地の魅力を上げていくということに関しては、まちで食べ歩きができる商店街に、インバウンドが良く集まるという話もあります。食べ歩きできる商品開発を支援することで、夜しか開けていないお店が、昼もお店を開けることになるので、活性化に繋がり大変面白いのではないかと思いました。現状は

販売できるお店が少ないので、魅力ある店舗ができること、もしくは茨木市の魅力ある商品が集まる場所があれば良いと思います。

委員長：資料3-3に観光の振興のコンテンツ造成に関して、重点取組になっていますが、特産品（お土産）等の創出・販売促進は、ふるさと納税とジョイントするなど、この項目にあてはまると思います。まちで食べ歩きするところは流行るというのは同意で、天橋立の駅前には浴場があるなど、食べ歩きとリラクゼーションがしやすい環境になっており、常に人で溢れ活気がありました。先程、プロモーションの話もありましたが、まちをプロモーションするのも市の大変な仕事ですので、そういう環境の整備なども考えていただければと思います。万博の話がでましたが、前回は吹田市での開催であり、茨木市は近接市そのため、たくさん人が流れてきましたが、今回は離れた場所での開催になるので、人は流れてこない可能性が高いと思います。たとえば、万博終了後にガンダム館のガンダムをダムパークいばきたに持ってきたら、たくさん的人が来ると思います。万博のレガシーを潰すのではなく、譲り受けることができれば、万博の機会をうまく活用できると思います。

藤井委員：観光の話がありましたが、茨木市には外国人が少ないというのが感想です。大阪市内では2人に1人が外国人という印象で、私自身も大阪市内でカフェをやっていたり、色々とカフェを回ったりするのですが、英語が話せないと店が回らないという印象を受けるほど、外国人客が来ています。ただ、茨木市の自分の店に戻ってくると外国人が1日1人もいないという状況です。茨木市では、なぜインバウンドが少ないのだろうかと考えると、インバウンドに向けたPRが少ないことが原因ではないかと思います。このことから、インバウンドを集める施策があれば良いと思います。人材確保という点では、茨木市でお店やイベントなど色々なことをやっていると、他の事業者から産学連携で何かしたいという話を去年だけでも4・5件いただきました。学生側からは、地域で何かしたいという想いはあるけど「どこと組んで何をすればいいのかわからない。」「地域の事業者とつながる場がほしい。」という声を聞いています。こちらに関しては、民間で場所を借りて企業と学生が交流できる場を提供できれば良いと思います。産学連携に関しては、商品の開発とか大きいカテゴリーの内容が大半なので、地域と繋がる産学連携があれば良いのではないかと思います。認知度やインバウンドの話につながることですが、茨木市がどんな町なのか、どんな店があるのかなどの情報発信が足りていないと感じます。もちろん個々のお店や企業側がしていくべきことであると思いますが、そういう情報が集約しているものがあれば良いと思います。

委員長：大学生が交流の場を求めているという話がありましたが、大学の立場では、企業の課題を大学の研究者を繋いで解決していくということが産学連携になります。立命館大学びわこ・くさつキャンパスでは、市から業務委託をいただき、市と大学と企業を結び付ける役割を担う産学コーディネーターを配置しています。茨木市でも学生と市の企業を結び付ける産学のコーディネーターを配置し、市内各大学や企業を回

りながら大学と学生と市内企業を結び付けるような役割をすれば、面白いのではないかと思いました。情報発信に関しては、23ページの観光の振興の基本取組にあるプロモーションとリンクするところがあります。重点取組ではありませんが、それに資する取り組みですので、今後は具体的な施策として手を打っていく必要があると思います。インバウンドのところはいかがでしょうか。

事務局：令和6年度、観光の取組ということで、大阪観光局と連携したプロモーションを進めております。今まさにどういうところをターゲットとしていくのかを議論しております。基本的な考え方としては外国人ではなくて、子どもがいる家族をターゲットとして考えております。こちらはダムパークいばきたを想定してインフルエンサーに取り上げていただくプロモーションを考えております。今はオープン前なので、ダムパークいばきたの周辺にある農園やカフェ等の情報を発信していくことを進めております。こちらは大阪観光局のツールを使って発信していくので、外国人の方も検索する対象になってくると思われます。結果的にインバウンドの方にも周知を図れると考えております。

委員長：これは茨木市だけではなく北摂7市で考えなければならない問題かもしれませんね。

事務局：そうですね、特にインバウンドに対して、慎重に考えなければならないと考えております。インバウンドの方が来られた時に外国語対応や色々な部分で、茨木市の体制が整わないまま、インバウンド誘致の取り組みを実施して良いのかと迷うところがあります。

委員長：準備ができていないところに来られても対応ができないので、Win-Winの関係は築けないということですね。

副市長：茨木市だけではなく横の市との広域連携という話は市長もしており、どういった打ち出しができるかという点を議論しているところです。

大坪委員：私も産学連携に興味があります。産学連携で学生に求めるものはハッキリしており、インターネット上で「こういった事業と一緒に取り組んでもらえる大学を求めています」ということを発信して、その情報を見て興味をもった学生が参加する流れになればありがたいと思います。もう一つ、何も創業支援を実施していない市もあるなか、茨木市は、創業支援に力を入れられています。茨木市では、なぜ手厚い創業支援をおこなっているのでしょうか。将来的に税金を納めていただくことや雇用の創出、賑わいの創出などを意図して創業支援を実施していると思うのですが、素案を見るとより多くの税収増が見込まれる中小企業の支援よりも小規模な創業支援に力を入れられている点に疑問を感じています。創業支援をするうえで、何を一番に考えておられるのでしょうか。

事務局：創業支援においては、「賑わい・活気」が大事であると思っております。創業すれば廃業する方もおられます但、循環していくことで、まちが新しくなり、創業が生まれやすい環境であると新しい力がどんどん生まれて「賑わい・活気」に繋がっていくと考えているため、創業支援に力を入れて取り組んでおります。

大坪委員：別の市で聞いた話ですが、創業支援等の支援に関しては、別の市の方が手厚い支援をしていれば、本社を移転させるということも聞いたので、継続支援はすごく大事であると思いました。

事務局：中小企業の支援に関して、企業誘致という別の制度では、新たな企業が来られるときには、補助金制度を設けております。対象は一定の規模以上の企業になりますが、毎年2.3件企業誘致がでております。企業誘致に伴い、雇用なども一定数生まれている状況です。

五寶委員：オープンカンパニーに関して、東大阪の「工場へ行こう」というオープンファクトリーの取り組みはとても面白いと思います。そこでは、各工場が普段製造している部品を少しワークショップ用にアレンジした部品を用意するなど、ユニークな体験ができる取り組みをおこなっていました。この取り組みでは、どこからやりなさいというのではなく、それぞれの企業が主体的に自分たちに何ができるのかを考えて、プログラムを用意し、町全体でこのイベントを盛り上げているような印象を受けました。先程、学生と連携してという話がありましたが、その際、企業から一方的に依頼するのではなく、学生にもある程度の責任をもたせるなど、一緒に考えながら、学生が主体性をもつような取り組みになると双方ともに貴重な良い機会になるのではないかと思いました。人材確保という話においても、オープンカンパニーが、育児をしていた方がまた働き始める機会や市外の方が転職先を知る機会の創出などにつながっていけば良いと思います。茨木市は外国人が少ないという話がありましたが、大阪以外の方が茨木市に来る理由としては何があるのかと考えたとき、全然思いつきませんでした。新たに作るのもいいですが、今あるモノの中から見つけることができれば良いと思いました。そのためには、茨木市の文化財と食べ物を結び付けて共創していくのが良いと思います。

委員長：茨木市は学生が2万人以上いるので、その学生を登録させて企業とのマッチング機会を設けるような取り組みがあつても良いですね。オープンカンパニーの件は、「工場に行こう」みたいな感じのわかりやすい取り組みは良いと思います。人材確保という面では、退職者や離職者の家に在宅されている方をもう一度呼び込んで、会社を立て直していくという雇用創造がありますので、色々と工夫していくことで人材確保に繋げていきたいと思います。

副市長：オープンカンパニーの中で、おっしゃられている主体性でいうと、今参加している企業さん自身も、一部の方がやっておられたところから、少しずつ広がってきて

ると思います。オープンカンパニーに参加いただいた企業の中にも、今回は主体的に動かれていた社長が、オープンカンパニーの直前に海外出張に行かれていたため、何も準備ができていなかつたのですが、海外から戻ってくると社員が主体性を発揮して準備がすべて終わっていたという話を聞きました。こういった実施する側の主体性が発揮されていくと楽しく実施できるようになると思います。そういった主体性を持つ人たちが広がっていくと学生と連携していく中で、学生も主体性を持って入ってもらえる仕組みに繋がっていくのではないかと思います。委員長から学生を登録させてマッチングするご提案をいただき、確かに良い提案であると思います。ただ、この取り組みにおいては、学生を便利使いしないように配慮しなければなりません。茨木市ではデザイナーとのマッチングを実施しており、そこのデザイン料金は安くしないように配慮しております。市の方でも、やれることを少しづつ実施していきたいと考えております。

中野委員：先日、農業祭がありましたが、農業事業者が減っているため、出店数が減少している状況です。そこで、先程、お話がありましたふるさと納税の商品を販売する場所として、農業祭を活用しても良いのではないかと思いました。

赤松委員：学生というキーワードが結構出ましたが、オープンカンパニーでは、企画の段階から学生を巻き込んで実施していくのは一つの手かなと思います。私共もビジネスマッチングということで、産学連携の企画を実施しておりますが、学生さんの知恵を拝借して実施していくことが、これから市の力にもなっていくのではないかと思っております。

委員長：産学連携の学は大学の学だけではなく、学生の学だということを理解して、取り組みを進めたいと思います。アクションプランについては今いただいた大事な意見を事務局と委員長の方でオーバーライズして、府内意見とパブリックコメントを進めていきたいと思います。それでは最後にスケジュールをお願いします。

7 今後のスケジュールについて

事務局：（資料4をもとに説明）

＜質疑・意見等＞

藤井委員：皆さんの意見を聞いていて感じたのですが、人材不足なのかなと思いました。弊社も7、8年前と比較すると、人材が集まりにくくなっていますが、大阪市内の店舗ではすごく人材が集まります。茨木市在住の方が大阪市内の店舗で働きたいということもありました。その方に「茨木市にも店舗があるので、そちらで働きませんか」と問い合わせたところ「結構です」と断られました。その点が気になり、色々と話を聞いてみると、その方は中崎町で働きたいという希望を持っていました。「なぜ、茨木市では駄目なのでしょうか」と問い合わせると、「まちが楽しくない」と返されました。今週、おにくるでイベントを実施するのですが、そのイベントには市内、市外からたくさんの人々が来てくれます。その方達の話を聞いていると「おにくるでイベントす

るのですね」「おにくるは知っている」という声を聞きます。茨木市に新しくできたおにくるは非常に注目されており、市外からもポジティブなイメージを持たれている施設なので、茨木市全体をカッコよくして「茨木市で働きたい」というイメージになれば良いと思います。ぜひ行政にはカッコいいまちにしていただきたいと思います。

委員長：魅力ある支援の仕組みやコンテンツはあるのですが、PRの仕方を改善していく必要はあるのかなと思います。中崎町のご紹介をいただきましたが、茨木市も負けずに頑張らないといけないと思います。

8 閉会

事務局：次回の委員会は2月～3月頃を予定しております。

事務局：それでは、以上をもちまして委員会を閉会させていただきます。
ありがとうございました。